鳥取県総合情報誌 vol.128

# とっとり Now

Winter 2020




巻頭特集

## 学び舎に輝き、ふたたび
廃校活用で生み出す地域の活力

特集

## 環境守れ！鳥獣ハンター起つ！
増える被害に待ったなし

鳥取県総合情報誌　vol.128

# とっとり Now

Winter 2020


| | | |
|---|---|---|
| あーとの森 | 現代美術　藤原 晴彦 | 2 |
| 巻頭特集 | 学び舎に輝き、ふたたび<br>廃校活用で生み出す地域の活力 | 4 |
| TOTTORI おもしろ発見手帖 | 鳥取県林業試験場 | 14 |
| ここにこの人 Human Life | 写真家　廣池 昌弘 | 15 |
| カメラアイ Camera Eye | 北海道のような丘の風 | 18 |
| 花咲くYokai談 水木しげると身近な妖怪たち | 口裂け女 | 20 |
| 鳥取のうま味 | 高揚のごちそう和食 | 21 |
| 特集 | 増える被害に待ったなし<br>環境守れ！鳥獣ハンター起つ！ | 22 |
| きらり匠人 継承の技が語る世界 | 建具職人　蔵光 哲男 | 30 |
| 企業紹介 | 有限会社ドアーズ | 32 |
| 文字の迷宮をゆく ～つれづれ書林女子～ Voice | 『牛を屠る』 | 33 |
| 読者プレゼント・編集後記 | | 34 |


※「VIVA!トットリLIFE」は休みます。



巻頭特集：
旧隼小学校内に整備されたコワーキングスペース



特集：鳥獣被害に立ち向かうハンターたち



●表紙イラスト●

池平 徹兵

いけひら・てっぺい

1978年福岡県生まれ。島根大学卒。東京オペラシティアートギャラリー projectN、岡本太郎現代芸術賞展、VOCA展などに出展。今回の表紙は、初めて白バラ牛乳を飲んだ時「ソフトクリームみたい」と感動した思いと、大山の北壁、さらに雪を組み合わせ、白の美しさを表現した。





藤原さんが手造りしたアトリエ

文／角秋 勝治　写真／青木 幸太

あーとの森 Forest of Art



『アブストラクト』(油彩、サムホール、2012年)



『Wark, '07-1』(油彩、120号、2007年)

## 進化する「美」のさすらい人

### 現代美術　藤原 晴彦

鳥取市街から車で約1時間、訪ねた中国山地のアトリエは、藤原晴彦さんが故郷に3年かけて手造りした。天井近くの小窓に山頂の緑と青空が映え、山陰から世界の美術潮流を視野に創作するにふさわしい天与の情景だ。

初期は幾何学的な抽象画を描いたが、「何を描いているか」と質問され、「流動的な色や形の表現」で鑑賞者との融合を試みた。元永定正（もとながさだまさ）(※)に師事すると、「何でもいい。不思議なもん作れ、真似はするな」との助言で、「うまく仕上げたい」との束縛から解放された。

1991年、全国公募展TAMON賞大賞を獲得、ニューヨークで1年間研修し、個展も開いて帰国した。それからは「予定に拘束されたくない」と、スタイル化を拒んで未知の挑戦を続ける。

掲載の『Wark, '07-1』は垂直の色面に激しい動性が、『アブストラクト』はざらつく地層に虹色が温かく、内面の葛藤とエネルギーが燃える。大地から始まったイメージは、液体・気体・光と化し、人間の孤独や希望を行き交うのだ。進化する「美」のさすらい人に、小窓の青空も刻々と変化していた。

※元永定正＝1922-2011年。世界的に高く評価されている前衛美術作家。

**ふじわら・はるひこ**

1954年若桜町（わかさちょう）生まれ。愛知県立芸術大学卒。82年、アメリカの現代美術を視察。87年吉原治良（よしはらじろう）賞美術コンクール展、現代日本美術展に再三入選。元永定正に師事。90年、Be-Art90準大賞、91年、全国公募展TAMON賞の大賞受賞。ニューヨークで研修、個展を開く。








写真提供：隼Lab.


写真提供：隼Lab.


写真提供：とっとり琴浦熱中小学校



# 学び舎に輝き、ふたたび

## 廃校活用で生み出す地域の活力

市町村合併や少子化に伴い、全国で廃校が増えている。
子どもたちの声が響かなくなる寂しさとともに、
とりわけ学校とのつながりが強い中山間地では、地域が廃れる危機感も。
そんななか近年では、校舎を有効活用し、
新たな感性で地域に活力を生む気運が高まってきた。
多彩なアイデアにより刺激的な場所へと蘇った元学校を訪ねてみた。

文／井田 裕子　写真／田中 良子

旧隼小学校
（八頭町）

▼

# 隼Lab.

「隼（はやぶさ）地区をイノベーター（※）の拠点に」―。のどかな田園地帯の小学校は、世代も立場も異なる人々が集い、高め合う場へと進化を遂げた。構想段階では多くの人に「無理だろう」と言われたプロジェクトは、時代を先駆けるモデルとなって田舎の未来を牽引する。

八頭町（やずちょう）隼地区では、同町出身の古田琢也さんを中心とする若者たちが会社を立ち上げ（２０１５年春）、飲食店と宿泊施設を運営、地域のにぎわい創出に一役買っていた。さらに隼小学校が２０１７年春に閉校することが決まると、町などと協同して「隼Ｌａｂ（ラボ）．プロジェクト」を始動させ、７つの民間企業の出資で株式会社シーセブンハヤブサ（代表：古田さん）を設立。同年12月、働く人も遊びに来る人も、地域の人もゆるやかにつながるコミュニティ複合施設「隼Ｌａｂ．」へと生まれ変わらせた。

※イノベーター：革新者、新しい動向のつくり手。



1年を通じて多様なセミナーが催され、多くの人が集う（★）

## 未来に誇れる田舎を創造



校舎をそのまま利用しつつ、洒落た雰囲気の外観に変身





コワーキングスペースは開放的な空間で広々



「地方にいても、できることはたくさんある」と古田さん



イベント後の人々や、県外客でにぎわうカフェ（★）



コミュニティスペースでは、高齢者など幅広い年代が定期的に集う（★）

問 隼Lab.
所 八頭郡八頭町見槻中154-2
☎ 0858-71-0581
Web http://hayabusa-lab.com

3階建ての校舎内も校庭もすべてが開放的。学び舎の趣を残しつつ、洒落たデザインが盛り込まれ、居心地の良い空間だ。2～3階のワークスペースは、会社とは別の場所で働く「リモートワーク」や、働きながら休暇を取る「ワーケーション」にも対応可能で、新たな働き方に関心が高まる昨今を見越していたかのよう。個室型の貸事務所は満室、コワーキングスペース（共有の仕事場）の契約者も含め約30社が利用。ＩＴ、自然エネルギー、クリエーティブ、映像、物流など異業種が入居し日々、刺激し合う。入居希望が増え、貸事務所をさらに校庭に増築中だ。

働く場の提供と経営塾の開催などで、ビジネスを後押しするばかりではなく、1階のカフェでは人々がくつろぎ、コミュニティースペースでは地域の高齢者が定期的に体操をしたり、大人の趣味講座や展覧会が開かれたり。子育て世代も盛んに集う。

「地域の皆さんのご協力あってこそ。今後も中山間地が抱える課題を見つめ、ビジネスと融合させながら、誇れる田舎にしていきたい」。冷静に実直に、でもふるさとへの愛情を持って語る古田さん。

経済、観光、福祉、芸術―と多岐にわたる分野が自然と交錯し、幅広い年代の多様な生き方が重なり合う。それぞれの暮らしを豊かにする隼Ｌａｂ．の可能性は大きい。

★＝写真提供：隼Lab.

旧以西小学校
（琴浦町）

# とっとり琴浦 熱中小学校

人はいくつになっても、目を輝かせて物事に熱中できるものなのだ。「とっとり琴浦熱中小学校」では、人生で2度目の小学生に戻った大人たちが、抑えきれない好奇心と、学ぶ喜びに胸をワクワクと躍らせる。

２０１４年に閉校した以西小学校を利用し、町と町民有志が18年10月、同校を開校。この地域には「建武の新政」を果たした後醍醐天皇が一時身を寄せた船上山があることを背景に、「ここからまた地域を盛り上げよう」と開校に向けた気運が醸成された。

熱中小学校（※）とは「学びたい大人の社会塾」で、企業経営者や大学教授など各分野の第一線で活躍する人を先生に迎え、さまざまなテーマの授業を展開する廃校再生プロジェクトだ。1期半年間で毎月1回授業を行い、これまで開催した第1～第3期には、琴浦町内だけでなく鳥取市や米子市、島根県から定員１００人をほぼ満たす生徒が参加。年代も30～80代と幅広い。ＮＨＫディレクターの倉崎憲さんが大河ドラマ制作にかける思いを語り、地元の株式会社チュウブ会長・大田英二さんが全国展開する芝事業の内容を紹介するなど熱い授業が繰り広げられ、生徒たちに大きな感動と地元への誇りを与えた。



「面白いことが多く、ストレスがない」と笑う佐伯さん（左）と、「知らなかった地域の人たちと出会える」と話す理事の小泉傑さん

**※熱中小学校とは**

地方創生の取り組みとして、人材育成や交流人口の拡大を目指し、2015年の山形県高畠町の旧時沢小学校でスタート。現在は国内15校・米国1校に拡大、さらなる広がりを見せている。

問 とっとり琴浦熱中小学校
所 東伯郡琴浦町宮木239
☎ 0858-49-8003
WB http://necchu-kotoura.com



校舎の玄関先では、
地域の人が持ち寄った野菜や
加工品を安価で販売している



# 2度目の学校生活に瞳キラキラ




盛り上がった入学式での記念撮影
(2018年10月)(★)




和気あいあいの授業風景（★）



課外授業では、近辺の森に出掛けたり、
滝遊びに興じたり。童心にかえって観察や体験を満喫する（★）

自発的にできた生徒会のメンバーが運営を手伝い、それぞれの特技を生かした焚火部や食部、着付け部などの部活動も盛ん。60代の女子生徒は「熱意がある人ばかりだから、授業のたびに元気をもらえる」と〝同級生〟たちと何度目かの青春を謳歌する。

これまでは町が運営していたが、２０２０年４月、立ち上げ当初からの生徒や町民有志が「一般社団法人熱中ことうら」を設立、民間運営に。

しかし、第４期は新型コロナウイルス感染拡大の影響でやむなく延期となる。めげずに「この機会に地元を見直そう」と、町内の名所や歴史遺産を巡る体験入学講座を開くと、思いのほか町民たちに好評を博し、次期への布石を打てた。

事務局長の佐伯健二さんは「気持ちよく協力し合える仲間ができて、楽しいことばかり。今後はオンライン授業で遠隔地の生徒にも受講してもらい、琴浦の魅力を都会の人にも伝えていきたい」と、情熱をたぎらせている。



★＝写真提供：とっとり琴浦熱中小学校

旧富沢小学校
（智頭町）

# キクラゲ栽培

コリコリとした食感のキクラゲは、中華料理や麺類に欠かせない食材の一つ。廃校跡で、手をかけ目をかけ水をかけ、試行錯誤でキクラゲ栽培に取り組むのが、智頭町富沢（ちづちょうとみざわ）地区の住民たちだ。栄養豊富でおいしく、有機ＪＡＳ認定（※）もされた安全さで徐々に知名度をあげている。

昭和初期の木造が趣深かった旧富沢小学校は、２０１２年に閉校。校舎を「残してほしい」という声もあったが、老朽化がかなり進んでいたため解体し、町が新たなコミュニティセンターを整備した。管理運営は富沢地区の住民で構成する振興協議会が担い、祭りやトレッキング、婚活イベントなどを開催。小学校がなくなったことで薄れがちだった、地域住民のふれあいの機会をつくってきた。

続いて同センターの管理運営費を賄うため、「一般社団法人とみざわ」を設立し、未経験でも育てやすいとされるキクラゲ栽培に着目。２０１６年12月に栽培施設「キクラゲハウス」を開所、約１８０平方㍍（メートル）のハウス１棟で栽培している。ハウス内の温度は20～24℃、湿度を80％以上に保ち、一定時間ごとに清浄な地下水を与え、適宜な換気で環境を調整する。

立ち上げから関わっている理事ら６人とスタッフ８人で作業し、手間暇かけて丁寧に育てられたキクラゲは、肉厚で大きく、ビタミンＤと食物繊維がたっぷりだ。

すべて手作業で収穫し、主に一般財団法人日本きのこセンターを通し、長崎ちゃんぽんの専門店を全国展開する株式会社リンガーハットへ納める。このほか町内の飲食店や地元の学校給食にも提供、一部は同ハウス内事務所や町内のスーパー、一般社団法人智頭町観光協会でも販売している。

※有機ＪＡＳ認定＝農林水産大臣が定めた品質基準や表示基準に合格した農林物資の製品



収穫したキクラゲを選別したり、乾燥させたり、ひとつずつ丁寧に作業するスタッフたち





名称変更や改修を重ねながら
明治・大正・昭和・平成の時代を生きてきた校舎。
最後は「富沢小学校」として幕を閉じた（★）



栽培している品種は肉厚でプリッとした「アラゲキクラゲ」。生のほか、乾燥させたものもあり

# 住民が力を合わせチャレンジ

問 一般社団法人とみざわ
所 八頭郡智頭町新見225-2
☎ 0858-75-3122（富沢地区公民館）

理事の西尾富昭（とみあき）さんは「キクラゲも子どもと一緒で、ちゃんと手をかけてあげることが大事。素直に大きく育つとうれしい」とにっこり。

理事と富沢地区振興協議会会長を兼務する西村剛（つよし）さんは「暖房費がかさむ冬場の栽培の再検討や、他のキノコ栽培も試みて採算性をより高めていきたい。『富沢といえばキクラゲ』と言われるよう、さらに一丸となって取り組んでいく」と、今後も地域での活力を生み出すため、意欲を燃やしている。

★＝写真提供：富沢地区振興協議会




運営や栽培に携わる西尾さん（写真左）、西村さんと富沢地区振興協議会事務局の河村圭子さん

旧俣野小学校
（江府町）

# 俣野ふれ愛学舎

「お変わりないですか？」。柔らかなその問いかけに、お年寄りの頬が緩む。標高300㍍の山あいにある診療所。設備は体重計と血圧計、聴診器のみ。だけど大病院にはないものがある。それは、医師と患者が語り合う温かい時間だ。ここは「俣野ふれ愛学舎」。過疎高齢化の進む日本の将来を託された、地域医療の拠点である。

地域医療とは、住民が住み慣れた地域で安心して暮らせるよう支える医療体制。江府町では医師・武地幹夫さんが20数年前から江尾診療所で、住民一人ひとりに寄り添った診察をしている。2000年からは鳥取大学医学部のサークル「地域医療研究部」の学生たちへの指導も。学生たちは、町民宅を訪問して生活の様子を聞き取るなど、地域医療の基礎を現場で学んでいる。

町は、その活動を後押しするため、廃校になっていた俣野小学校を改装、2019年4月に「俣野ふれ愛学舎」を開いた。運営は住民有志が立ち上げた「江府町の地域医療を支援する会」（会長：宮本正啓さん）が担い、学生たちが宿泊しながら学べる体制を整備。これにより学生と住民の交流がさらに深まったという。武地さんのもとで地域医療を学んでいた医師・田本明弘さんの協力で、学舎内に診療所も開設され、現在週2回、1日2時間の診察を行う。



「宿泊体制を整備できたことで学生と住民の交流がより深まりました」と本高さん





「医療とともに地域のつながりは大事。誰もが気軽に立ち寄れる場所に」と宮本さん





木のぬくもりがあふれる校舎内。1階には2つのシャワー室、2階には宿泊できる畳敷きの休養室が2つ整備されている



「長いときで1人に30分かかることも。野菜をもらうこともありますよ」と微笑む医師の田本さん



# 暮らしに寄り添い健康を守る

「ここでは患者さんとしっかりコミュニケーションをとれる。他にはない経験ができています」と田本さん。宮本さんは「個人個人の暮らしぶりを把握してもらっているからこそ分かる体調変化もある」と実感。同会事務局長の本高善久さんは「今の時代、中山間地に診療所ができることは奇跡」と感謝する。

江府町で活動した学生たちは、地域医療の担い手として各地に羽ばたいている。「住民の生活と医療が一体となったこの地域すべてが学生にとって学ぶべき場所。全国のモデルケースになれば」と武地さん。

心を通わせながら、病気ではなく〝人〟を診る。医療の原点を見た気がした。

問 俣野ふれ愛学舎
所 日野郡江府町俣野690
☎ 090-5375-1744



患者さん同士顔見知りが多く、和やかムードの待合室は元職員室。奥の診察室は校長室を改修したもの



ヨーロッパのチロル地方風建築様式の校舎と背景の奥大山との調和が美しく、人気の撮影スポットにもなっている

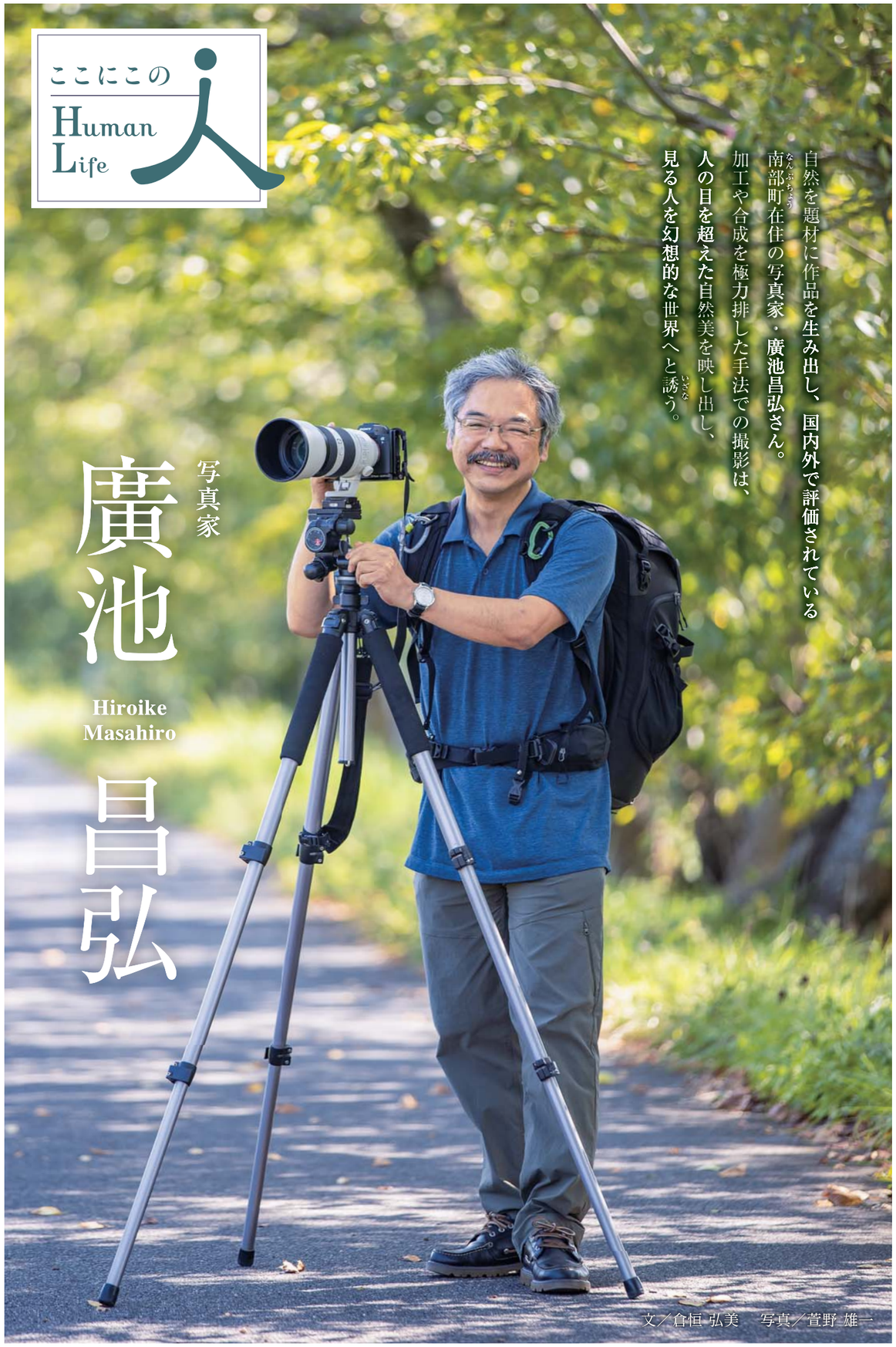
ここにこの人 Human Life

# 廣池 昌弘

写真家

Hiroike Masahiro

自然を題材に作品を生み出し、国内外で評価されている南部町在住の写真家・廣池昌弘さん。加工や合成を極力排した手法での撮影は、人の目を超えた自然美を映し出し、見る人を幻想的な世界へと誘う。



文／倉恒 弘美　写真／萱野 雄一



鳥取県林業試験場
所 鳥取市河原町稲常 113 番地
☎ 0858-85-6221
WB https://www.pref.tottori.lg.jp/ringyoshiken/

# 木と共にあり続ける未来を描く！

TOTTORI おもしろ発見手帖 づるり探険隊長がゆく Vol.3

木を育て森を作り、育った木を切って売る林業。この自然相手の活動を永続的に行っていくための未来を描き、独創的な発想力や忍耐力で研究を重ねるのが「鳥取県林業試験場」だ。県土の約7割を占める森林を守り育てながら、効率良く高い収益が得られる木材加工・利用法などの技術を提供し、林業振興に貢献している。

## 8年の歳月をかけ開発に成功！




花粉症が社会問題化し、全国的に発生源のスギの品種改良が求められている。同試験場では無花粉スギを開発するため何十種類もの人工交配を行った結果、15000 本の中から無花粉かつ成長が優れる、または虫や雪に強い「ハイブリッド無花粉スギ」の開発に成功。８年もの歳月をかけた地道な努力と工夫が実を結んだ。

＊開発までの道のり＊

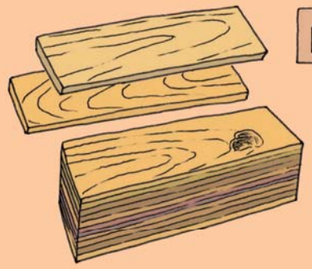
- **1 年目**：県内優良スギと県外の無花粉遺伝子保有スギを人工交配し、雌花を成熟させ球果（F１）を採取。
- **2-3 年目**：F1の種子を育てて花粉を調査した結果、県内の優良スギは無花粉遺伝子を保有していないことが判明。
- **4-5 年目**：前年までの調査で無花粉遺伝子を保有させたF１同士を人工交配し、球果（F２）を採取。
- **6-8 年目**：F２の種子を育て、花粉を調査。県内優良スギの遺伝子を持つ無花粉個体85本の開発に成功。



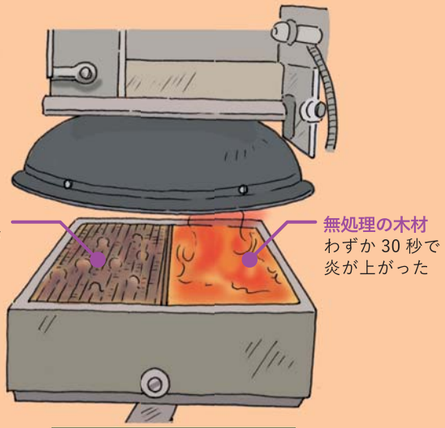

## 「さし木」で育てて普及へ

全国的には種子から育てる「実生苗」が主流だが、鳥取県では「さし木苗」が伝統的な手法。手間はかかるが、育てた全ての苗木はクローンになる。開発した苗は、2024年の供給開始を目指す。

## 燃えにくさで内装材への用途拡大




4ミリ程度にスライスした薄い板を乾燥させた後、何枚も積み重ねて接着するLVL（単板積層材）。木材の色の濃淡が織りなす模様が美しい。これに薬剤を染み込ませ、防火・防炎性を高める研究が進行中だ。開発が進めば、壁や天井などの内装材での利用が大幅に広がる。




木材の燃焼比較実験

熱を照射し発熱速度を計算する「コーンカロリーメーター」を使い、「無処理の木材」と「薬剤注入済み LVL」の燃え方の違いを実験。実用化に向け、何度も繰り返す。

文・イラスト／雲坂紘巳（くもさか・ひろみ）　納豆が大好きなイラストレーター。1982 年生まれ、鳥取県育ち。づるづるした食べ物が好きなことから、屋号は「スタジオづるり」。
WEB=http://dururi.com

# 技術と発想で可能性を追求



## 森に輝く光に魅せられて

暗く、鬱蒼とした森の中に瞬く神秘的な光―。廣池さんが故郷の山に生息するヒメボタルを知ったのは7~8年前、50歳になった頃だった。ゲンジボタルは2~4秒間発光するが、ヒメボタルはフラッシュのように1秒間に1~2回点滅する。

「写真では、ゲンジボタルは光の線に、ヒメボタルは光の点になる。カメラ近くを飛んでピントが合わなくても、そのボケが一層大きく写る」。すっかり魅了され、毎年6~7月になると連日、生息地に通うようになり、これまでに県西部で20カ所以上の生息場所を確認している。

5台のカメラを携えて暗い森の中を進み、それぞれの場所に三脚で固定、シャッターのタイマーをセットする。「高温多湿を好む、月光が差す日は飛びにくい、川幅が広いと怖がる…」など、長年ヒメボタルに寄り添うなかで、さまざまな飛翔条件を把握してきたものの、その日撮れるかどうかは運まかせ。前日に下見をして予測しても、翻されることも多々という。

「未だにタイミングが難しい」と苦笑しつつ、どこか楽しそうな廣池さん。なぜなら「実はカメラの回収後が一番ワクワク。想像を超えた〝アートな世界〟が写っていたりするから」。

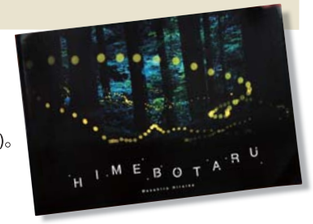
## 世界で2位の高い評価

そして今年。このヒメボタルを題材にした作品を世界最大規模の写真コンテスト「ソニーワールドフォトグラフィーアワード（SWPA）2020」に出品、プロフェッショナル部門（自然・野生生物カテゴリー）で2位に輝いた。応募総数は世界から34万5千点、この部門だけでも13万5千点という難関を突破した末の栄冠だ。

作品は9枚で構成。ホタル撮影で一般的とされる複数写真の合成はせず、高度なテクニックを必要とする一枚撮りにこだわった。まるで計算されたかのような構図の光跡が美しく、神秘的な世界観と高い技術力が評価された。

**ひろいけ・まさひろ**

1962年南部町生まれ。米子東高等学校、広島大学工学部卒業。SEの仕事をしながら、写真家として活動を開始。2019年、写真集『Quest／探求 第1集』（今井出版）を出版。2020年はSWPAのほか、ロシアの国際写真コンテスト「5TH 35AWARDS」MOTIONカテゴリーで3位を受賞。その他、国内外での受賞歴多数。同年7月『HIMEBOTARU』（小さな今井）を出版。



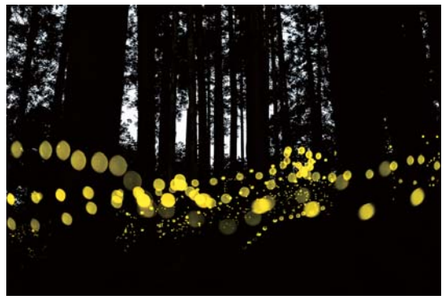

2020年7月に出版された『HIMEBOTARU』(小さな今井)。SWPAの受賞作品も掲載



「5th 35AWARDS 2020」MOTIONカテゴリーで第3位を受賞した「Departure」（★）







「Sony World Photography Awards 2020」で受賞した9枚組作品のうちの2枚（★）

# 一瞬の自然美を捉えて切り取る

## できるからこそしない

廣池さんが写真を始めたのは高校生時代。石川県まで自転車で旅するなどアウトドアが好きで、行く先々で風景をカメラに収めた。本格的に撮影するようになったのは、北海道で始めたシステムエンジニア（SE）の仕事がきっかけ。写真をスライドショー表示するプログラムの企画と開発を始め、サンプル用写真を撮影する中で、奥深さや面白さに目覚めていった。その後は、桜前線を追いかけて車で北上するなど、日本海側を中心に全国で撮影し、国内の写真コンテストで入賞することも増えていった。

南部町にUターンしたのは10年ほど前。故郷の自然の豊かさに改めて気づき、シャッターを切った。そして2015年、自宅近くの桜並木を題材にした作品が「オリンパス・オープンフォトコンテスト2014」でグランプリを獲得。



「6TH Fine Art Photography Awards 2020」プロフェッショナル部門でノミネートされた「CLIMBERS」（★）



「オリンパス・オープンフォトコンテスト2014」でグランプリを受賞した南部町の桜並木（★）

桜の木に積もる雪を写した幻想的な作品は、降りしきる雪にLEDライトを当ててスローシャッターで撮影した一枚だ。

加工や合成をしないのには、理由がある。「SEとして画像編集ソフトを長年使ってきたので、加工はむしろ得意。ただ、だからこそしたくない。ありのままの姿には、自然の物語があると、ある時気づいたんです」。

技術をとことん磨き、豊かな発想で、写真の可能性を追求し続けてきた所以だろう。

昨年は初めて冬の大山（だいせん）に登った。「一度登ると下山するのは翌日。欲張りなので、いろいろ撮りたくなる」と、はにかむように笑う。奇跡の一枚は、自然が織りなす造形から生まれる。身近な所にもまだ見ぬ世界がきっとある。それを求めて、廣池さんは今日もシャッターを切る。

★＝写真提供：廣池昌弘



## 北海道のような丘の風

（南部町）

撮影／廣池昌弘（南部町）

南部町（なんぶちょう）の丘の上、畑や牧草地が広がるその中心に大きな山桜の木がある。雪が降り積もると一面真っ白になり、山桜だけがその存在を主張する。それはまるで北海道の丘の風景のようだ。

# 花咲くYokai談

水木しげると身近な妖怪たち

文・写真／足立 倫行
イラスト／ミギワン

妖怪ファイル No.11

## 母親の妖怪のデフォルメか 三 口裂け女 三




薄暗がりに、マスクをした長い髪の女が立っていて、通りかかった子どもに「私、きれい?」と声をかける。「きれい」と答えれば、「これでも…?」と言いながらマスクを外す。その顔は般若のように恐ろしく、口は耳まで大きく裂けている!

『口裂け女』は1979年、突如として都市から出現。小学生を発端に大人も巻き込んで、またたく間に全国へと噂が広まった現代の妖怪だ。

民俗学者の宮田登さんは、『口裂け女』は昔の『山姥』や『産女』が現代風にデフォルメされた怪異現象と見る。彼女たちは、自分の子を生き延びさせるため、里に下りたり道ばたに現れたりする。強烈な母子愛によるものだろう。

現代では、そんな母親の一方的な愛情が、子どもたちには圧力となり、恐怖感に変わる。「きれい?」が「勉強した?」に聞こえるのかもしれない。

※参考文献：宮田登『妖怪の民俗学―日本の見えない空間』（1990年、岩波書店、同時代ライブラリー）

足立倫行（あだち・のりゆき）
ノンフィクション作家。境港市生まれ。同郷の先輩である水木しげるさんに約2年間密着取材し、『妖怪と歩くドキュメント 水木しげる』（1994年新潮文庫※）を刊行。主書に『日本海のイカ』『北里大学病院24時』『血脈の日本古代史』など。
※今井書店より復刻版発売中

ミギワン
漫画家・イラストレーター。石川県生まれ、鳥取県育ち。
WEB=http://migiwan.com/
facebook=https://www.facebook.com/migiwanFB/

## 奇人・変人が幸せな人生の手本

水木さん特有の人物評価の基準に、「奇人・変人」ぶりというのがある。誰かと出会って、その人を評価する時の第一声が、「あの人、変わってます！」。「常識」をはみ出しているか否かが、とても重要なポイントらしい。

有名どころでは、熱狂的ファンを持つ伝説の漫画家・つげ義春さん。一時、水木プロダクションで働いていたことがあった。

「つげさんが言うんですよ、『首の上に頭があるから重たい』と。変でしょ？そんなこと考える人はニュートン以来です」。その場の笑いのタネなので、嘲笑の対象というわけではない。つげさん級の奇人に対する、最大級の賛辞なのだ。

水木さんに言わせると、幸福な人生とは「自分の好きなことができる人生」。逆に「世間のしがらみに縛られた人生」は、幸せではない。従って、はみ出しを気にしない奇人・変人の人生こそ、「手本」なのだ。

水木さんの父は、「働く姿を見たことがない、〝静養第一〟の人」だった。また尊敬する南方熊楠（※）は、全裸同然の姿で世界レベルの粘菌の研究を続けた。

もっとも。誰にも負けない奇人・変人界No.1は、「死者の声」を聞きつつ「幸福」を追求し、日本に「妖怪ワールド」を確立した、水木さんその人では？

※南方熊楠＝1867-1941年。和歌山県出身。博物学、民俗学の分野における近代日本の先駆者的存在。



アメリカ旅行中の水木さん（写真右）と筆者
（1993年、カリフォルニアのインディアン居留地）



# 鳥取のうま味

## 真心あふれる 新感覚の良味

〝繊細で自由度が高い和食〟に魅せられた若き料理人、上田淳史さん。開店から7年、「料理は愛情」をモットーに、店主として腕を振るう。地元で水揚げされた鮮魚、個人農家の米などこだわりの素材と、〝もっとおいしく〟の気持ちを隠し味に日々、至高の一皿を提供する。

メニュー開発も食べる人が第一だ。「魚だけでは物足りない」という客の要望に、ウナギならぬ「牛肉のひつまぶし」を考案。鳥取牛のリブロースやサーロインをローストし、ひと口大に切って丼に盛り、ワサビやネギなどの薬味と茶漬け用のだしを添える。肉には、梅酒や黒糖などを使った特製ソースがかけられており、そのままで、薬味をのせて、茶漬けにしてと3度楽しめる。ボリューム満点ながら、だしや香味野菜がアクセントになり後味さっぱり、女性にも好評だ。

「和食の命はだし」。上田さんの心配りはここにも生きる。汁物には、基本のカツオやコンブにタイの焼いた骨も使用。香ばしさやうま味をプラスし、食欲をそそる。夏場には煮物の塩味を濃くし、暑さに疲れた体をいたわる。

近年は、記念日の利用が多い。上田さんの真心こもった〝ごちそう〟を囲み、笑顔があふれる。店名のとおり「和ごころ」で、人々の心もつなぐ。

文／岩村 利恵　写真／山田 真実



■■ 高揚のごちそう和食 ■■

ランチ限定の「牛肉のひつまぶし」（1500円・税込）。小鉢、漬物、みそ汁付き。この日の小鉢は、カボチャと白ナスのそぼろあん。みそ汁には季節の野菜がたっぷり、丼のご飯には白ゴマや大葉が混ぜられ、肉との相性が抜群だ。

**和ごころ 上田**

所 鳥取市徳尾131-32
☎ 0857-77-2156
営 11時30分～14時
（月～金曜日・祝日）
18時～21時30分
（月～土曜日の予約のみ）
休 日曜日

増える被害に待ったなし

# 環境守れ！ 鳥獣ハンター起つ！

野生動物と人間はこれまで、
お互いの距離を適度に保ちながら、
生活圏をすみ分けてきた。
しかし昨今、環境変化などの影響で
野生動物の数が増えすぎ、
頻繁に農作物を食い荒らすなどの
被害が深刻化。
人々の暮らしを守ろうと、
動物たちの前にいま、
鳥獣ハンターたちが起つ！

文／鳥飼 明子　写真／山内 一峰
扉イラスト／ミギワン

# 鳥獣被害の現状と対策

「住宅地にイノシシが出た」「シカが道路を走っている」「クマに倉庫を荒らされた」など、近頃は全国各地で同様の話題を耳にする。動物たちの目的は食糧。農業者が手塩にかけて育ててきた稲や野菜、果物などの農作物を、出荷直前に食べてしまうのだ。

「昨年度の鳥取県内の被害額は約7300万円と甚大。金銭面だけではなく、耕作意欲の減退や大型獣への恐怖など、目には見えない被害もある」と、県鳥獣対策センターの永田計次（けいじ）さんはその深刻さを語る。

県全域でイノシシによる被害が8割で、稲の実が入る直前に田んぼに入り、稲を踏み倒したり、稲穂を食べたりする例が多い。クマは特産品のナシが大好物、シカは農作物の他にも、スギやヒノキの樹皮を食べて枯らしたり、奥山の下草を食べ尽くしたりと生態系や環境への影響は深刻だ。このほか、ヌートリア、アナグマなどの農作物被害も数多く発生している。

## 県内被害の8割がイノシシ

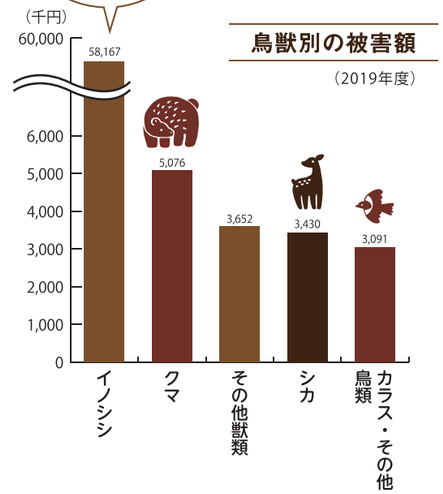
田んぼの周囲は、イノシシが掘った跡だらけ（★）





**鳥獣別の被害額**

（2019年度）






わなの仕掛け方を現場で教わる参加者たち（鳥取県ハンター養成スクール）（★）



「イノシシのほかシカ被害も年々、全県に広がりつつある」と永田さん（写真左）。「捕獲ありきではないが、侵入防止対策により農地を守るとともに、捕獲の担い手となるハンターを増やしたい」と森原さん





模擬の銃を持ち、撃ち方のコツを学ぶ（鳥取県ハンター養成スクール）（★）

## 若い世代の免許取得は増

しかし、人間側だって黙ってはいない。イノシシには、電気ショックで撃退する「電気柵」、跳躍力に優れるシカに対しては、2m以上の高さがある「ワイヤーメッシュ柵」+「ネット柵」で侵入を防止するなど、各農家や集落でさまざまな対策を講じる。「ただし柵は設置後の管理が大事。定期的な点検、破損箇所の補修、こまめな除草などが必要です」と永田さん。そのため、同センターや各市町村担当課では、設置・維持管理方法のアドバイスやサポートを継続している。

農地を守るとともに、現れる有害鳥獣の捕獲も重要だ。個体数を減らすため、県緑豊かな自然課では、捕獲推進と狩猟者の確保・育成に力を注ぐ。県内の狩猟免許所持者は約2300人（2020年5月現在、のべ数）。同課長補佐の森原秀雄さんは、「狩猟免許試験対策の講習会開催や免許取得にかかる費用の助成などにより、近年は20~40代の若手が増加傾向にあります」と話す。また、免許所持者を対象とした「鳥取県ハンター養成スクール」は、即戦力となるハンターの育成を目標にしており、実践的な内容が好評だ。

このような取り組みや捕獲奨励策により、県内の昨年度捕獲数はイノシシ約1万3千頭、シカ約9千頭と過去最高に。加えて捕獲した獣を解体処理して食肉に加工する施設の増加、ジビエ料理の人気拡大といった流れもあるようだ。

とはいえ、シカやイノシシは繁殖力が強く、増加スピードに捕獲が追いついていないという現状がある。有害鳥獣被害との闘いは、これからが踏ん張りどころだ。

## 4種類の区分あり　狩猟免許

狩猟を行うには、鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律に基づく狩猟免許が必要。4種類の区分があり、各都道府県で実施される「狩猟免許試験」を受け、合格すると取得できる。また、実際に狩猟を行う場合には、狩猟期間の前に狩猟者登録を行う必要がある。免許の種類と、それぞれの免許で使用可能な猟具は、以下の通り。

### わな猟免許



- くくりわな
- はこわな
- はこおとし
- 囲いわな

### 網猟免許

- むそう網
- はり網
- つき網
- なげ網

### 第一種銃猟免許

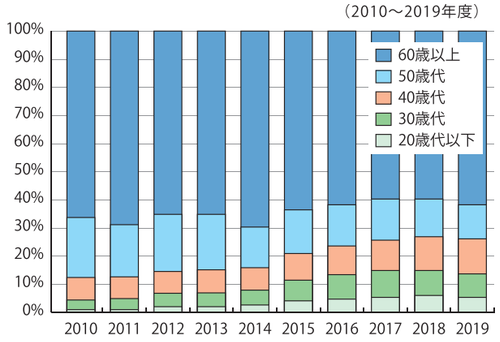
- 装薬銃（ライフル銃、散弾銃）
- 空気銃

### 第二種銃猟免許

- 空気銃

※銃器による捕獲を行うには、猟銃を購入・所持・使用するための「銃の所持許可」の取得も必要。

**【狩猟免許所持者の年齢構成の推移】**




問 鳥取県緑豊かな自然課
所 鳥取市東町1丁目220
☎ 0857-26-7872（自然環境保全担当）
WB https://www.pref.tottori.lg.jp/midori-shizen/

問 鳥取県鳥獣対策センター
所 八頭郡八頭町郡家100
☎ 0858-72-3820
WB https://www.pref.tottori.lg.jp/choujutaisaku/

★=写真提供：鳥取県

若手狩猟集団
CAZADOR

## 柔軟な発想で多様な活動展開

狩猟免許を取得したからといって即、ハンターとして活躍できるわけではない。実際にベテラン猟師について狩猟に出掛け、わなの作り方や仕掛け方、捕獲した獣の止め刺し（※）・血抜き・解体処理方法など、さまざまな技術や細かな知識を現場で身に付ける必要がある。

しかし、そう簡単に学びの機会は訪れない。若手が増加傾向とはいえ、鳥取県内の30歳代以下の免許所持者は約1割。同世代でのつながりは少なく、ちょっとした疑問や相談をする仲間もいないため、各自手探りで技術や情報を集めるしかない。若手ハンターたちは、人知れずそんな悩みを抱いていた。

大阪から琴浦町に移住した高橋龍太さんもそんな一人。2015年から琴浦町地域おこし協力隊として、鳥獣被害対策を中心とした里山保全の仕事に就き、同年秋にわな猟の狩猟免許を取得。ジビエにも興味を持ち、イノシシ肉のおつまみを提供するバーを鳥取市内で週末だけ開店するなど、積極的に活動していた。

「そこにお客さんとしてやって来たのが、森林組合作業員兼新米ハンターの森本康史さん（鳥取市在住）と伊藤亜実さん（松江市在住）。お互い同じ悩みを持っていると分かりました」。そこで情報交換や勉強会をしようと17年2月、「CAZADOR」を3人で結成した。

※止め刺し＝わなにかかった獣に銃や刃物を使って止めをさすこと。



取材当日に鳥取市国府町でイノシシがわなにかかり捕獲。カサドールメンバーのほか、写真右はこの土地の所有者・谷岡英顕さん





シカやイノシシの皮をなめす研修会（写真上）。保育園で園児たち向けに有害鳥獣や環境の話をわかりやすく説明する高橋さん（★）



実際に捕獲したシカで、指導者に解体方法などを教わる研修会（★）



カサドールのメンバー。捕獲したジビエを調理し、試食しつつ交流を深める



「楽しみながら長く活動を続けていきたい」と高橋さん



## 仲間でつながり、情報発信も

早速、わなの仕掛け方や解体処理場の見学など勉強会を開始。スキルアップはもちろん、狩猟に関する情報発信にも努めた。また、ジビエ料理の試食、獣皮なめし、革・角を使った小物づくりのワークショップを開いたり、自分たちでジビエ料理を考案してイベントで出店したり。アイデア豊富な活動に賛同する仲間が徐々に増え、今ではメンバーが約40人に。

活動の様子を聞きつけ、各地域からもオファーがくるようになった。「保育園では園児にイノシシの話を、高校ではぼたん鍋とイノシシハンバーグの調理実習をやりました。こうした機会に、地元で起きている鳥獣被害、里山保全や生態系維持の大切さ、動物の命をいただくことの意味と感謝を伝えていきたい」と高橋さんは言う。

最近は、有害鳥獣の皮や脂の利活用にも力を入れている。「イノシシ革は牛に比べて軽く、通気性も良いうえ、破れにくいのも特徴。県外の工場でなめしてもらい、クラフト作家や革製品を扱うショップなどに卸しています。」と高橋さん。イヤリングやキーホルダー、イノシシ脂のアロマキャンドルなど、洒落た小物が次々と生まれている。

柔軟な発想で、仲間と共に楽しむことを大切にしてきたカサドール。新しい価値観で今を生きる若手ハンターたちに、今後も注目したい。



イノシシの皮を使ったイヤリングと脂を使ったアロマキャンドル


問 CAZADOR 代表 高橋龍太
☎ 080-6120-1864
WB https://www.facebook.com/cazador201702/


★= 写真提供：CAZADOR

ハンター女子１
## 山本 暁子さん
HUNTER

# 勇ましく地域課題に体当たり



止め刺し（写真上）、血抜き、運び出し（写真下）と手際よく作業する



猟銃を静かに構え、狙いを定めて引き金を引く。「パンッ！」と大きな銃声が響きわたり、銃弾は草むらに横たわるイノシシのこめかみに当たった。もう動かないのを確認して慎重に近寄り、頸動脈にナイフを入れる。途端にドドッと血が噴き出した。

「まだ心臓が動いているので、ポンプの役目をする。こうやって血抜きをします」。そう説明するのは、ハンターの山本暁子さんだ。大学進学を機に鳥取を離れ、大阪や東京で過ごしてきたが、「田舎暮らしがしたい」と2年前に帰郷。鳥取市国府町大茅地区にある亡き祖父の家で、夫と2人で暮らしている。

ハンターになったきっかけを尋ねると、「この集落には銃を扱う猟師がもういなくなって、獣に田畑が荒らされるという話を聞いて。女性でもできるというし、じゃあやってみるかと軽いノリで」と屈託なく笑う。その後すぐに、第一種銃猟とわなの猟の免許を取得したそうだ。

毎朝、日の出とともに起き、山中に20個程度仕掛けているわなを2時間かけて見回る。実は、本業はフリーランスのＩＴエンジニア&オンライン家庭教師という山本さん。融通が利く在宅ワークだからこそ、時間と手間のかかるハンターも兼業できるという。

「私がイノシシやシカを捕ると、集落のおばあちゃんたちが『ようやった！』と大喜びしてくれるんですよ」。

しかし現状は厳しく、「国府町内に解体処理施設がないので、捕獲しても基本は廃棄。捕獲・解体した獣肉を流通にのせるシステムを作り、ビジネス化することが必要です。そうすることで、ハンターを生業にできる人が増え、有害鳥獣の捕獲数も増えるはず」と、問題を提起する。地域の課題に真正面から立ち向かうその姿は勇ましく、ほれぼれした。



「まさか猟銃を持つことになるとは。人生は予想外でおもしろい」と山本さん



ハンター女子２
## 池田 幸恵さん
HUNTER



多方面で活躍する池田さんは「やりたいことが次々、出てくるんです」

# パワフルに奔走、次々と道開く

大山町の町議会議員、スキーパトロール、農業者、そしてハンター。異色の肩書きが並ぶ池田幸恵さんは徳島県出身、「思いっきりスキーがしたくて」18年前に大山町にやって来た。4年後、同町内に暮らす夫と出会い、限界集落の農家の嫁に。「無農薬のもち米を作り始めたら、2年連続でイノシシにやられて。もう頭にきて棒を持って田んぼのイノシシに向かっていった」。このままではらちが明かないと、ハンターになることを決意したという。

しかしハンターになってすぐ、狩猟の過酷さに愕然。かかる時間と労力は半端なく、山の移動で車のガソリンは3日でカラに。あまりにも個人負担が大きかった。また当時は、解体処理施設がなく処分は埋めるのみ。捕獲するたび大変な作業で、泣きながら穴を掘っていた。

「これではハンターになる人なんかいない」。危機感を感じた池田さんは、町に解体処理施設を建てようと奔走。民間の食肉加工場に頼み込んで、解体処理の勉強をさせてもらった後、町役場と交渉を重ね、「大山ジビエ工房」の建設にこぎつけた。ハンター仲間にもビジョンを丁寧に説明し、賛同を得た有志11人で「大山ジビエ振興会」を発足。２０１９年12月、振興会が指定管理者となって工房をスタートさせた。

イノシシが食肉として活用されることは、捕獲するハンターにとって大きなやりがいだ。地域産業の活性化にもつながり、町の新たな特産品となっている。

さらに親子向けの解体体験会も開催。「パックに入った肉が森を走り回っているわけではないと、子どもたちに知ってもらいたくて。記憶に残れば、ハンターの仕事も広まるはず」と、地道な活動を続けている。

このほか、狩猟に興味のありそうな若者に免許取得を促したり、県外者にハンター移住を勧めたりと精力的に動く池田さん。そのかいあって、現在、大山町には女性ハンターが少しずつ増えてきた。彼女の明るさと包容力、芯の強さが人と人をつなぎ、周りにたくさんのパワーを与えている。



大山ジビエ工房でイノシシの処理作業をする池田さん（★）

問 大山ジビエ振興会（大山ジビエ工房）
所 西伯郡大山町羽田井1419-226
☎ 0858-33-5738
FB https://www.facebook.com/daisen.gibier/

★= 写真提供：池田幸恵



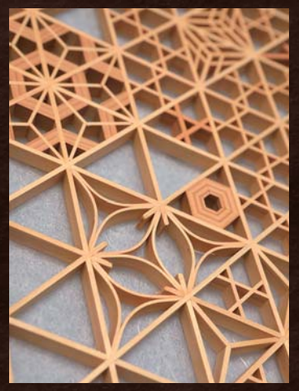
木片の厚みや太さを調整する
鉋の数々

KIRARI TAKUMIBITO

# きらり匠人

継承の技が語る世界

日本独自の伝統を守り、技術を受け継ぐ
県内の〝光る匠たち〟を紹介します。



パーツの組み合わせにより、さまざまな
模様になる



細かい木片からあっという間にコースターが完成

## 遊び心が生み出す精緻な模様

細く小さな木片を、施した溝に合わせて釘を使わず組み込む組子（くみこ）細工。直線が曲線となり、曲線がさらに「幾何学」へと変化する。それはさながら万華鏡。蔵光（くらみつ）哲男さん（69）は、木片の美しさや力強さを凝った模様の組み合わせで表現する。

### 建具職人　蔵光 哲男

50年以上、この道ひと筋。わずかなズレが全体に影響する繊細な世界だ。上手な先輩に手ほどきを受けたり、写真や作品展示会で見たものを真似したりと、独自で努力を重ね複雑な組み方が出来るようになった。

以前は、組子を使った障子や欄間も多かったが、時代の波で和室が減るにつれ、組子の需要も技を持つ職人も減少。それでも「やっているうちに好きになった」と、蔵光さんは作り続けた。

どんな大作でも設計図はない。「考えながら手を動かすから、つい柄を入れ過ぎちゃう」と笑う。2013年の全国建具展示会に出品した２枚折の屏風は、数十種類もの複雑なパターンを絶妙なバランスで配置、県技能士会連合会会長賞に輝いた。

現在は照明器具やプレート、コースターなど、自由な発想で製品を作る。「細かすぎてうんざりすると投げ出して、別の仕事をする。しばらくして戻ると、またやる気が出てちょうどいいよ」とちゃめっ気たっぷり。この遊び心が現代のライフスタイルにも合う逸品を生み出している。

文／松村 亜紀子　写真／田中 良子



全国建具展示会（２０１３年）に出品した
２枚折の屏風



ライトを点灯すると柄が美しく
浮かび上がる照明器具

問 有限会社建部
所 鳥取市川端1-111
☎ 0857-23-2741



MEMO

最古の組子細工は飛鳥時代にまでさかのぼり、法隆寺の金堂などに見られる。模様は200種類以上。材料はスギやヒノキなど針葉樹が多く、木の色の違いを生かして模様を描く。長さの調節では0.1ミリのズレも許されず、一人前になるのに10年はかかるとも言われる。細工の正確さや、模様の選択や配置が職人の腕の見せ所。



種類の違う鉋（かんな）を使い分け、コツコツと作業をすすめる蔵光さん



「得意なことに集中」
「苦手なことは他の人がカバー」―。
働きにくさを感じる人たちに、
働きやすい職場を提供するのが、
ペットフード製造の有限会社ドアーズ（倉吉市関金町）だ。
寛大に多様性を受容する、
この会社の門をたたく人が後をたたない。

# 個性に合わせた働く場を提供

２０１３年に自己資金で開業、４人で始めた社員も今や50人、年商も７億円と大幅に増えた。次は事業の多角化を考えそうだが、代表の柴田智宏さんは、あえてＯＥＭ（※）専門を貫く。取引先は、１００円均一専門店や全国展開の大型スーパーなど大手企業を中心にすでに16社を数え、安定した受注が確保できている。他の分野には手を広げないことで、生産に集中できるという。

対照的にここで働く人々は、幅広く個性豊かな顔ぶれがそろう。例えば、適応障害や発達障害、知的障害、自閉症などの障がいがあることも、そのひとつ。



チーズにササミを巻いたり、完成品を箱詰めしたりと、担当に分かれて手際よく作業する社員たち

柴田さんは以前、社会福祉法人に勤務した経験がある。その頃から「障がいではなく個性、または得意不得意」と感じてきたという。「例えば並外れた集中力があったり、ほんのわずかな色の変化で異物を見つけたりと、得意な部分を生かせることも多い」からだ。もちろん、障がいに応じた配慮は欠かせないが、作業内容やメンバーのマッチングなどで工夫を重ね、個々にあった働き方を選んでもらう。

また、就労に悩む人は、障がいの有無にかかわらず多くいる。家族の介護や母子家庭、高齢者、持病で通院中、ニートなど、何らかの事情を抱えた人たちは、横並びにそろえた業務では働くことが難しい場合が多い。これらをすべて受け入れるのが同社の特徴だ。基本的に応募して来た人は、面接の時点で採用を決めるという。

そのうえ、勤務日数、時間は極めて自由。出社、退社の時間もそれぞれの都合で決めていい。事情を抱えていれば当然、「今日、休みます」と、当日朝の連絡も多いが、「問題ありません。そこから調整します。心地よく働いて欲しいから」と、柴田さんはおおらかだ。

「これからも一人でも多くの方を採用したい。働くことに障がいを抱えている人の雇用を守り続ける事が自分の使命だ」。優しいまなざしの奥に、確固たる決意が光っていた。

文／角田 治　写真／山崎 登

※ＯＥＭ＝他社ブランドの製品を製造すること



「『就労に困っている人に可能性のドアを開く』という思いで社名を決めました」と柴田さん

**有限会社 ドアーズ**
代　表／柴田 智宏
設　立／2013年4月23日
資本金／2700万円
所　倉吉市関金町関金宿3-1
☎　0858-33-4095



## 文字の迷宮をゆく

つれづれ書林女子



# 誇り高き労働と命の賛歌

『牛を屠る』　佐川光晴著（双葉社）

現在は専業作家の著者が、かつて自ら志願し勤務した「屠畜場」（※）での10年半を回顧した自伝的エッセイ。

百戦錬磨の先輩にもまれ、黙々とナイフを研いでは一心不乱に牛の皮を剥ぐ日々の中で、次第に職人としての肉体と精神を獲得していく〝私〟の成長は小気味よい。

「ナイフの切れ味は喜びであり、私のからだを通り過ぎて、牛の上に軌跡を残す。／労働とは行為以外のなにものでもなく、共に働く者は、日々の振る舞いによってのみ相手を評価し、自分を証明する」。

食われるために屠られる牛と、熱い血潮を吹く彼らを美しい精肉に仕上げていく熟練の男たち。危険な真剣勝負の現場では、感傷も理屈も思想も出る幕はない。牛と対峙し、研鑽を積み、技術の高みに到達した者だけが知る愛情と恍惚、働いて生きる、ということの圧倒的な実感が読む者に迫る。まるで、お前は生きているか、と問いかけるように。

行間から高らかに響きわたる、人生を自らの手で構築してゆく誇りと悦び。〝食育〟や〝道徳〟に侵されることのないその無垢な快哉は、すべての労働と命へ捧げるエキサイティングな賛歌だ。

※屠畜場…家畜を殺し食肉用に解体する施設

文・イラスト／前田 環奈

まえた・かんな
鳥取市出身。古本屋「邯鄲堂」店主。古本の販売のほか、陶磁器の修理（金継ぎ）も行う。

【邯鄲堂】
所　鳥取市吉方町2-311
☎　080-2940-2127

## voice

■□ 127号の感想から ■□

「あーとの森」をいつも楽しみにしています。127号掲載の丸山勝三さんの作品は、精神の高さを感じました。
（大阪府高槻市　中村 宗男）

災害救助犬と警察犬の記事が大変興味深かったです。言葉だけは知っていましたが、毎日どのような訓練をし、どのような現場で活躍しているかは存じませんでした。訓練士さんが犬にたっぷりの愛情を注ぎ、ほめて育てる姿に感銘を受けました。
（栃木県那須塩原市　森本 紀子）

災害救助犬、警察犬と活躍する犬がいて、それを世話している人がいて、必要としている人がいる。人間社会に貢献してくれている犬のことを、改めて考えてみたいものです。
（山形県山形市　三浦 健司）

特集「ずっと、そっと…見守る愛」で、ＮＰＯ法人日本野鳥の会鳥取県支部の活動を興味深く読みました。特に視覚障がいのある人たちとのバードリスニングを初めて知り、感動しました。美しく可愛らしい鳥たちの紹介「野鳥図鑑」も良かったです。
（京都府城陽市　石井 恵子）

里山歩きを趣味としています。127号の野鳥の会の活動の記事を読み、自然や野鳥観察にもチャレンジしようと思いました。
（茨城県茨城町　別所 直紀）

127号の「ここにこの人」。再現美容の横川千歳さんに、とても感銘を受けました。「絶望の中で見つけた光」。諦めない心が自らを救い、人を救っているのですね。強さと柔らかさが素敵です。
（岡山県玉野市　中戸 洋子）

再現美容の横川さん。立て続けに辛い出来事に見舞われ、一時は落ち込んでも負けずに再起され、素晴らしい。人生の方向は、心の持ちようで変えていけるのだなと思いました。
（兵庫県西宮市　東川 佳奈）

127号のカメラアイ。曼珠沙華は「天界に咲く花」と言われるんですね。我が家も少しですが、この時季に咲いてくれます。今年はきっと天界に想いをはせながら、観賞することでしょう。
（鳥取県鳥取市　多久田 英治）

今年、米子にイチゴ狩りに行き、「とっておき」を食べました。今回、「おもしろ発見手帖」の記事で、販売までに20年の歳月がかかっている事を知り、とても驚きました。
（島根県出雲市　久谷 美恵）

# 読者プレゼント

応募〆切 2020. 12/31 消印有効

■ 応募方法
下記の項目を記入し、ハガキまたは電子メールでご応募ください。
① 希望の商品記号または商品名
② 掲載記事への意見・感想
③ 応募用クイズの答え
④ 住所・氏名・年齢・電話番号

※②の感想が次号の「VOICE」に掲載される場合、住所・氏名が明記されることをご了承ください。また商品の当選は、発送をもって発表に代えさせていただきます。

■ 応募先
〒680-8570 鳥取市東町1丁目220
鳥取県広報連絡協議会（鳥取県庁内）
「とっとりNOW読者プレゼント」係
メールアドレス：now@kouhouren.jp

※お預かりした個人情報は、プレゼント発送以外の目的に使用することはありません。

## ●応募用クイズ●

Q 鳥取県林業試験場が8年の歳月をかけ開発に成功したスギの名称は何？カタカナ6文字を記入してください。

□□□□□□無花粉スギ

127号のクイズの答えは「さえずり」

### A



**乾燥キクラゲ**（20g） 【5名】

地域住民が協力し合い育てたアラゲキクラゲ。ビタミンDと食物繊維を多く含み、水に戻すと肉厚でプリっとした食感。和洋中さまざまな料理に合う。

問 一般社団法人とみざわ
☎ 0858-75-3122

### B




【3名】

**廣池昌弘写真集「HIMEBOTARU」**
（20cm×30cm）

県内に住むヒメボタルを5年間にわたり撮影。世界最大規模の写真コンテスト受賞作を含む約50点を収録した。ホタルが描く神秘の世界を堪能できる。

問 小さな今井
☎ 0859-21-2775

### C



**2021年版鳥取県民手帳** 【3名】
（14.5cm×8.5cm）

鳥取県の統計や酒蔵マップ、料理レシピなどのご当地情報が詰まった手帳。コンパクトなサイズ感ながら書き込み欄が広く使い勝手がよい。

問 今井印刷株式会社
☎ 0859-28-5551 ※色は選べません。

### D



**組子細工コースター**（直径14cm）【6名】

幾何学模様が美しい木製コースター。鍛錬を重ねた職人による、組子細工の技が光る逸品。グラスだけでなく、小さな観葉植物を置いてもマッチする。

問 鳥取県広報連絡協議会
☎ 0857-26-7086 ※柄は選べません。

### E



【5名】

**鳥取県観光卓上カレンダー2021**
（15.7cm×18.2cm）

美しい四季折々の鳥取県の景色が、月替りで楽しめる卓上カレンダー。1日ごとにメモスペースがあり、スケジュールが書き込みやすい。

問 公益社団法人 鳥取県観光連盟
☎ 0857-39-2111

### F



【3名】

**草木染め鹿革のミニフラットポーチ**
（12.5cm×7cm）

県内で捕獲したシカの皮を有効活用して作ったポーチ。なめした革は丈夫で柔らかく、使うたびに手になじむ。小銭入れやカードケースなどにオススメ。

問 thaw（ソー）
☎ 080-1939-9508 ※色は選べません。

### G




【5名】

**三朝温泉フェイスマスク**（3枚入り）

世界屈指のラジウム温泉「三朝温泉」の源泉をたっぷり配合したフェイスマスク。保湿成分のヒアルロン酸も加え、ハリと潤いを与えてくれる。

問 三朝温泉旅館協同組合
☎ 0858-43-0431

### H




【5名】

**ゆりはまブレンドドリップコーヒー**
（5袋入り）

湯梨浜町の「二十世紀梨」の皮をブレンドしたコーヒー。焙煎士がナシの風味に合う4カ国の豆と調合し、爽やかでフルーティーな味わい。

問 ゆるりん館
☎ 0858-32-2539

## Editor's note　□■編集後記■□

「ほんとは殺したくなんてない」。銃で止め刺しした後、彼女は言った（22頁）。愛嬌のあるイノシシが昔から大好きだった。それなのに、まさか撃つ立場になるとは、と。▼生き物を望んで殺めたい人がどれだけいるか。多くは、人の生活を脅かす被害が増えたため、やむにやまれずなのだ。鳥獣が増え過ぎた理由は諸説あるが、未来を見据えず、環境を破壊してきた我々人間側に、責任の一端がないはずはない。ならば、ひと昔前のように、共生の道を探れないのか。だが、それがすでに容易ではないから、葛藤を抱えつつの狩猟となるのだろう。▼そう、頭では理解する。だが息絶える間際の悲しそうな瞳が、いまだ脳裏に焼き付いて離れない。なんとも胸が痛む取材だった。▼一方、廣池さんが撮影を続けるヒメボタル。（15頁）。人々を自然体で魅了する生き物たちが、まだココで生きている。失くしたものは取り戻せないが、せめて今の環境を大切にして、この美しい光景を長く、永く後世に残したい。【Hi】


鳥取県総合情報誌 vol.128
とっとりNOW Winter 2020

《企画・編集・発行》鳥取県広報連絡協議会
〒680-8570 鳥取市東町1丁目220（鳥取県庁内）
《制作》株式会社シセイ堂デザイン
〒680-0841 鳥取市吉方温泉3-802 TEL.0857-22-1122

0857-26-7086
0857-29-6621

とっとりNOW 検索
https://www.kouhouren.jp/
2020年12月1日発行 定価315円